ネイチャーなら

《わたしたちは大和の自然を愛します》

発行2018年4月1日
4月号・第195号
奈良・人と自然の会

会長　鈴木　末一

新入会員歓迎会

Contents

ホームページでは、カラーで見ることが出来ます

URL http://www.naranature.com

壮春力歩	1		3月・自然教室チームだより	10
Monthly Repo.ならやま	2		3月・月例研修会・報告	11
里山の今	3・4・5		ギャラリーならやま	12
字遊字感	6		ならやまプロジェクト	13
私のふるさと	7		行事案内＆行事予告	14
やさしい病害虫講座	8		幹事会報告・編集後記	15
椎茸菌打ちイベント・報告	9			

壮春力歩

会長　鈴木 末一

“なら”と“しか”

ならやま里山林周辺に、迷い鹿が舞い込むようになった。放置していると、手塩にかけた野菜や草花類が食い荒らされてしまう。見つけ次第、愛護会に連絡をとるようにしている。

国の天然記念物奈良公園の鹿は、2017 年 7 月 16 日の時点での頭数は 1,226 である。過去最も多かったのは 1994 年の 1,293 で、以後 1,100～1,200 の間を推移していた。2009 年から 6 年間は、1,000 台となっていたが、近年漸増傾向にある。

奈良のシカは日の出とともに行動を開始し、採食場へ移動する。採食後は休息する場所(休み場)へ。夕方になると、採食しながら泊まり場へと移動する。日没後は泊まり場で採食したり、休息したりしながら朝まで過ごす。

個体の行動圏は 10～20ha で特定の休み場・採食場・泊まり場を持ち、ほぼ決まったルートで移動する。両性の安定的な群れ形成はほとんど認められない。オス・メス別々の休み場・泊まり場に入ることが多く、雌雄それぞれの生活体系による社会を組織している。

ところで、標題の「なら」と「しか」は前述の話題ではない。20 年来の知己から聞いた「平仮名話し」の受け売りである。人に頼みごとをした時、ふたりの返事が「それならやります」と「それしかできません」だったら、貴方はどちらの人に頼みますか、と知己は語る。

例えば「教育」を「きょういく」と書けば、「今日行くところがある」かもしれないし、「教養」を「きょうよう」と書けば、「今日用事がある」かもしれないと言う。このような話題を手帳にびっしりと書き留めている。

この知人は介護事業に関わり、全国の施設を訪問している。持ちネタを入居者に語り掛けると、みるみる表情が明るく、にこやかになってくるのが分かると言う。目標や目的を持って過ごすことの大切さを教えられた。

虚往実帰

半世紀ほど前は、車社会にはなってなく、バスや電車での通勤スタイルであった。ダルマストーブがあり、宿直制度もありの古き時代のことである。まだまだ駆け出しであったが、ストーブを囲んで夜な夜な先輩方からいろいろと教えられた。上司のお供でのお付き合いも社会勉強になった。

会議や研修で出張した場合、報告書には必ず「今日はこのようなことを学びました。明日から早速活かしていくように努力します」という内容のことを書くようにと、叩き込まれたのであった。毎回そのような訳にもいかないことは百も承知の上でのことであり、常に心掛けて物事に対処するようにとの厳しくもあり温かい教えでもあった。そのような日々の中で、今も忘れられない教えのひとつに「虚往実帰」という言葉がある。

『荘子（徳充符)』の王駘(おうたい)の物語の中で、『虚往実帰』という言葉が用いられている。中国の魯（ろ）という国の王駘は、足を切られた受刑者だったが、その人に教えを請う人が絶えない。孔子の弟子が孔子に対して、王駘のことを尋ねる。孔子は「自分も将来、王駘を先生として教えを請いたいのだ」と打ち明けた。孔子は、王駘の心のありようについて、静かに澄んだ水面のようであり、永遠に無くならない絶対自由の世界を心の中に持っていると、その徳の高さを讃美。そして、「そのような聖人であるからこそ、その人から学ぼうと、方々から人々が集まり、正しく導かれて帰ってゆくのです」と語っている。

弘法大師空海は、中国で師事した恵果和尚を王駘と重ね、王駘に教えを請おうと方々から集まった人々に自分自身を重ね、この『虚往実帰』という言葉を用いた。恵果和尚というとてつもなく偉大な聖人に出逢い、その方の静かに澄んだ水面のような心に、正しく導かれて満ちて帰国する。『虚往実帰』という四文字には、恵果和尚という真に仏道を体得した人の心のありようや、その偉大さをも表現されているといえよう。

凡人である私には無縁の世界かもしれないが、いつまでも覚えている言葉ってあるものですね。

Monthly Repo.　ならやま

八木 順一

2月22日(木)　活動　晴れ　73名

シイタケイベントが近くなった。里山Gでは、シイタケ用の榾木をはじめ植樹の準備などで大忙し。また春に向けて各グループとも傷んだ施設や設備の点検・修繕に重点的に取り組む。

イベントの最終確認の件やたくさんのシニア自然大卒業生の当会入会などが打ち合わせで報告される。エコGはハウスの完成を目指して、景観Gはチッパー作業を中心に行う。また、ビオ班は池の排水溝の整備、花班は山野草園の整備、そしてパトGはパトロールと傷んだ階段の整備を実施する。

2月24日(土) イベント　晴れ　40名＋42名

温かい日和に恵まれ、シイタケイベント実施。82名が活動を満喫。全員で記念撮影後、山に入り、シイタケの菌打ちと植樹を行う。午後は心づくしの豚汁を堪能したのち、再度山に入る。丸太渡りやブランコ遊びなどに興じる班、そしてソヨゴなどの立ち木を伐採する班に分かれての活動になったが、楽しそうに活動に参加できた。イベントに更に積極的に参加をし、環境に対する思いをもっともっと深めてほしい。

3月1日(木)　活動　晴れ 71名＋3名

強い風で、太い幹の木が倒れ、山の中の観察路が荒れる。後片付けで大変だ。しかし自転車道の倒木は県によって早速除去された。また、松茸の栽培に長年取り組んでこられた藤村先生から講義を受ける。その後、現場を観ていただくが、「素晴らしい」とお褒めの言葉をいただく。時間もかかるようだが、その日を夢見て頑張りたい。里山Gはシイタケの菌打ち、エコGは畝作りや元肥作り、そして景観Gはチッパーでの竹林処理を行う。また、ビオ班は西池の排水溝整備、花班は日陰植物園への肥料入れ、その他パトGは階段点検と後片付け、そしてパトロールへ出る。シニア生2名。

3月8日(木)　活動　曇り　57名＋1名

寒い。活動日かどうか判断に迷う朝になるが、実施の原則を再確認し、協働作業の段取りや会費納入のお願いなどを行う。そして今年度最後の協働作業、無事に終了した。不順な天候のため、作業を昼までで終える G もあった。シニア生1名。里山 G はシイタケの菌打ちと植樹、エコ G は野菜の種まきを中心に、そして景観 G はチッパー作業を実施。その他ビオ班は西池周辺の整備、花班は皇帝ダリア畑の草取り、そしてパトGは1コースパトと観察路の草刈りに取り組む。

3月15日(木)　活動　晴れ　71名＋2名

暑い。もう筍が見つかる。夏が来たような錯覚に襲われる。夏に向かって季節が確実に進む。その準備に追われ、忙しい一日になるが、打ち合わせでは新入会員歓迎会の段取りが中心になる。見学者2名。里山Gはシイタケの菌打ちとテント・薪棚作りの準備、エコGは夏野菜の種まきやビニールハウスの仕上げ、そして景観 G はチッパー作業とマツタケ山の笹の根切りを行う。またビオ班は西池の周辺整備と東池の水抜き、花班は皇帝ダリア園の整備、そしてパトGは観察路の整備と4コースのパトロールに出る。

里山グループ

菊川　年明

◆ ならやまの薪割り

シニア自然大学校から実習生の方がよく訪れる。実習生の方は世話役に従って園地や里山の見学と、いずれかの作業班に加わって実務の教習を受ける。あるとき、女性の実習生の方が、世話役から「実習に薪割りをしてみてはいかがですか」と問われ、びっくりしていたことがあった。「薪割り」と聞けば、たいていの人は斧を振りかざして丸太に挑む重労働をイメージするから、それを「やらないか」と言われれば、驚くのは当然である。

しかし、 本会には薪割り機という便利な機械があり、それを使って行う薪を割る作業だから、困難な作業でないことを説明すると安心して、「やってみよう」ということになる。そして、取りかかってみると、面白いようにコナラの丸太が割れるので、おおかたの方は非日常的なことだから喜々として作業にいそしまれている。

私が子供の頃は戦前であったから、かまどでご飯を炊くのも、風呂を沸かすのも、燃料はすべて薪であった。それに当時の主婦は炊事、洗濯、掃除など、すべてが手作業であったから忙しく、薪割りなどは子供の仕事にされていた。街中に住んでいたので、薪は購入したもので、粗く割られたものが束になっていたが、そのままでは使いにくいので、更に細分する必要があった。薪を細分する道具は手斧であるが、手斧は手入れが行き届いていなかったので刃先は丸くなっており、「鈍器」であった。家事手伝いの中で一番嫌な仕事が薪割りであったことをよく思い出す。それに当時はコナラのような良質の薪は少なく、割りにくい節だらけの松材が多かったことも作業を困難にしていた。

エコファームグループ

松本　武彦

◆ 里山に春

里山に春が巡ってきた。日の光を浴びて佇んでいると、昔、春の語源について聞いたことがあることをふと思い出した。なぜこの季節を「はる」と呼ぶのかということである。

これには、もとになった幾つかの言葉が考えられるという。それらは「張る」「墾（は）る」「晴る」である。「張る」は草木の芽がいっぱいに膨らむ様子をいい、「墾る」は田を耕すという意味、そして「晴る」はよく晴れ渡った様をいう。いずれもこの時期特有の光景を表しており、これらが「はる」の語源だという。この里山にはこれらすべての「はる」があり、思い思いの春を感じられてよい。そして何よりも、この恵まれた自然のもとでよき人たちと共に日がな一日活動できるのがうれしい。

ついでながら、「春」という字は、「草が日を受けて群がり生ずる様」を表すという。暇に任せてじっとこの字を見ているとそのようにも見えてきそうだ。

さて、農園では育苗のための夏野菜の種まきやじゃがいもの植え付けが行われている。

今年改修されて一回り大きくなった温室は、ナス、キウリ、トマト、トウガラシ、カボチャなどのポットでにぎやかになった。

畑では「ごろごろ植え」という里山では初めての方法で、じゃがいもの「キタアカリ」が植えられた。これは、従来のように種いもを土中に埋めるのでなく、畝の上に種いもを並べその上を畝ごとマルチシートで覆うという方法である。こうすることで、いもの肌が黒くなる「そうか病」を防ぐことができるほか、雑草の繁茂をも防ぐことができる。美味をお届けできる日もそう遠くない。

芽ぐみや耕耘機の音に混じって人々の声が明るく弾む「はる」である。

景観グループ

福田 美伸

◆松林、竹藪の整備

昨年「内閣総理大臣表彰」受賞式後のレセプションで、鈴木会長が天皇陛下に拝謁され「私たちのボランティアでは松茸を採ろうと、がんばっております」と、話されたと聞いてびっくり。私たちは、献上松茸という、大きな力を得ました。

私は、川井顧問のユートピア構想に賛同し、3 年前の年賀状には「今年の目標」として「竹林と松林の整備を行います」と書きました。鹿背山へ松林整備の仕方を習うため週 1~2 回、約 1 年行きました。一昨年の暮れ、景観グループ、そしてたくさんの皆さんと共に竹藪整備。「実りの森の竹藪は竹畑に激変」全員が川井顧問に褒めていただきました。昨年 7 月ベースキャンプへ、最後でした。川井顧問が、シニア自然大学校の先生とおいでになり、「彼が松林の整備を進めています」と紹介していただき「最高のプロジェクトである」と。

第 1 段階「地かき」、私たちは、昨年 4 月から全員参加の協働作業として行ってきました。1 年を掛けての作業は大変でした。参加者は最初のころ 50 人以上で、すぐに完了するだろうと思いました。しかし、暑い夏には 30 人ほどに、作業時間も短くなり、9 月 20 数人となり、なぜか 30 分ほどで半数が消え心配しました。でも、3 月全員の力で予定通り「松林の地かき整備を完了」することができました。また、3 月 1 日大和菌学研究所、藤本先生をお招きし、見ていただいた結果、「整備場所および、地かき」は完璧であるとのお墨付きをいただきました。4 月第 2 段階、私たちは「植菌」へと進みます。5～10 年後には「必ず、天皇陛下へ献上」できます。そして、私たちは、子や孫たちへ「マホロバ松茸の採れる平城山」をプレゼントしてやろうではありませんか！

パトロールグループ

有元 康人

◆パトロールＲＥＰＯ

厳しい冬も終わりに近づいて、今日のならやまは春の嵐、夕べからの強風で、ベースキャンプの東側のコナラの大木が道をふさいでおり、通行できない状態になっていました。

お水取りの前の散策路も、生暖かい風が肌に触れ例年より一足早く春を感じています。

観察路の倒木の状態が気になりましたが、コナラの枝は、すでに落下しており、今回は道をふさいでいたのも 2 か所、一時期より大幅に少なくなっています。

落葉している自然林の風景は、ナラ枯れの幹が乱立しているのと、松くい虫によるアカマツの被害木とで殺伐とした感じを受けています。会員の中には、山が不健康になっていると評言されていますが、私が感じているのと同じかどうか？

パトロール班の活動で散策路の階段の補修やロープ張りもほぼ終わり、倒木も少なくなって片付け作業が無くなってくると次に何を行うのか？
不健康と感じる山を、生き生きとした山に変えるには、いかがしたら良いのか？自然の再生力に任せるのか、再生時間を短縮するのに会員で何かできるのか？

パトロール班では散策路の周りの植物の保護育成と、少しでも楽しく山を歩いてもらえるような見所のある散策路作りに知恵がいるのでは？

殺伐とした風景も、すぐに春の息吹で隠してくれます。クロモジやサンシュユ、ツツジなどの春の花と、すべての植物の若葉で光輝くならやまになってきます。

もう春はすぐそこです。

ならやま虫だより

菊川 年明

◆超小型のクワゴ

クワゴはカイコの祖先（原種）で、約5000年前の中国でクワゴからカイコが作られたといわれており、幼虫、成虫ともにカイコによく似ている。クワゴの幼虫は少し褐色で、少し小さいくらいが違いである。成虫（中型のガ）の違いは、カイコガは白っぽいが、クワゴは褐色、それにカイコガは飛べないが、クワゴは飛べることである。

クワゴの繭はカイコの繭と同様に俵型ではあるが、殻は薄い。クワゴとカイコで特筆すべきことは、両種の間には繁殖力のある子孫が生まれることで、極めて近縁関係にあることがわかる。

クワゴは、よく見られる昆虫ではないが、ならやまではベースキャンプの前に昨年まであった大きなクワの木で毎年見られた。冬、クワの木の葉が散り果てた後に、枯葉の散り残りのようなものが見られたが、これは繭（抜け殻）の糸が枯葉とともに枝に絡みついている姿であった。昨年夏のある日、古川さんが「クワゴの繭だ」と言って、ガの繭を私にくださった。しかし、繭は長径が20mmくらいで、あまりにも小さいので「クワゴかな？」との疑念を抱きつつ飼育容器に入れておいた。繭の長径は普通40mmくらいある。8月中旬に羽化し、ガが現れたが、クワゴとは思えないとても小さなガであった。しかし、いろいろ調べた結果、ウルトラ級矮小型のクワゴ（オス）とわかった。

ベースキャンプ前のクワの木はなぜか近年弱り、病的な小さな葉しか付けなかったので、この木にいたクワゴの幼虫は発育不良であったものと思われる。このクワの木も昨年10月末に倒れてしまった。古川さんにいただいたクワゴは、ならやま最後の貴重なクワゴになったのではなかろうか。

ならやま花だより

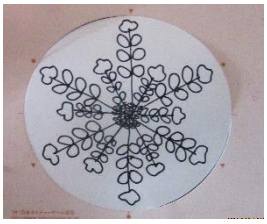
桜木 晴代

◆ロゼット

あの夏のフィールドの光景が思い出せないほど冬の野は一面が枯葉で覆われ、あの野の花たちはどこに？と。しかし野の花の多くは枯葉の下でロゼット状に葉を広げ春の来るのを待っています。

ロゼットとは

＊ロゼットの語源はバラ
＊茎を立ち上げず放射状にバラのような形に広がる葉のこと
＊踏みつけられたり刈り取られたりする環境で生きるため、または、冬の間の芽を厳しい寒さや風雪や乾燥から守った後太陽光を無駄なく受けるための戦略的な形。


タネツケバナロゼット図案

ならやまのロゼット

タンポポ

チチコグサモドキ

オオバコ

オニノゲシ

シロツメクサ

ナズナ

オオイヌノフグリやホトケノザが早くも春の訪れを知らせてくれています。その傍らのロゼット状の葉を見つけ、どんな花を咲かせるのかを観察してみるのも楽しいかも知れません。

「言葉」の処方箋

岡田 安弘

若者の話し言葉に乱れを感じる昨今です。「全然OKよ」と言う会話を耳にすると、「日本語が泣いとるぞ」と、独りつぶやいています。「全然」の次に来るのは否定語のはず。我々世代の「全然」は「まるっきり駄目」という時に使っていましたよね。観念するしかないのでしょうか。

たまたま観たＴＶ番組で、かつて日本に留学し日本語が話せる米国の若者が、「全然、大丈夫」と言っていたのには、驚きが嘆きを通り越しました。

「絶対」とか「とても」も必ず否定語を伴っていました。かく言う自分が「絶対、これがいい」と使ってしまいます。苦笑するしかありません。つくづく、言語は生きものだと思う。たくさんの人が使い出すと、国語辞典も追いかけざるを得ない。手元の大辞林で「全然」を引くと、否定語と説明したうえで、末尾に「話し言葉の俗な言い方」「非常に良いという使い方もある」となっているではありませんか。

10年ほど前になるでしょうか、朝日新聞の１面コラム「天声人語」が、米国で半世紀近く暮らす日本人女性からの手紙を取り上げていました。この人は日本語の「ら抜き」が母国で広がっているのに驚いています。「後生大事な母国語が、得体の知れぬものへと変身、私の言葉は地球温暖化で徐々に海水が上昇する南方の島々のごとく、だんだん立つ瀬を失っています。もはや私の日本語は冷凍食品ですか」と嘆いていました。

テレビ画面のテロップ（字幕）は難聴の方にはありがたいですね。例えば街の声を聞く番組で「・・・の参加資格は？」と問われ、マイクを向けられた人が「どなたも出れる」と応えました。字幕では「どなたも出られる」と「ら」を加えて表示している。話し言葉が乱れても、書き言葉は懸命に頑張っているなあとうれしくなる。たまに字幕も「ら」抜きのままがあると、がっかりです。

ＮＨＫニュースが「等」を読み間違えていたのを思い出しました。「○○表彰は○○さんなど５人が受けた」と読んでいた。○○さん「ら」と言ってほしい。「ら」は人を表す名詞について複数を表し、「など」は人以外の事柄に用います。

さすがに「馬から落馬」と言うアナウンサーはいません。しかし、同義語の誤用はまかり通っています。「注目を集めている」という表現は、今や決まり文句のよう。「注目」と「集める」は似たもの同士だと思いませんか。「注目される」と言えばすっきりします。「第１回目」の第と目も同じように、第１回か１回目とすべきです。

「ほぼ断定」もよく見かけます。「断定」が「ほぼ」では断定になりません。「断定に近い」なら許容範囲かな。「不審火の疑い」はいただけない。「不審」は疑惑そのもの。最近読んだ本に「・・・は8月下旬以降に先送りされる公算が高い」とあった。「高い」は誤り、「大きい」が正しい。略して公算大。公算高とは言わない。

えらそうに講釈をたれていますが、自省を込めて失敗例を打ち明けます。先輩への手紙に「耳障りが良いので・・・しました」と書き、「耳障りは、良いときには使わへんで」と叱られたことがあります。

近く著書を出す予定の甥っ子に、この教訓を急いで伝えねばと思いました。その返信には参りました。「叔父さん、僕は漢字に弱いので執筆には各種辞典を引きます。指摘されたケースは僕が確認した辞書によると、耳ざわりが良いときは耳触りと書き、悪いときに耳障りと書くようです」と教えられ、老婆心にも注意が必要だと学んだ次第です。

最後に質問をしてペンを置きます。

＜問い＞　次の文章の誤りを指摘してください。「売り場の照明を25%減らしたり、駐車場以外の照明を消して対応している」。

＜答え＞　前段で「減らしたり」とした場合、後段は「消したりして」とするのが正しい。「したり」と書けば「したりして」と受ける。得意になっている僕を「したり顔」と言います。「お目障り」ではなかったでしょうか。

私のふるさと

ふるさと喪失？

井戸　八穂子

あまりに幼少の時期を過ごしたのでふるさとの実感がありませんが、父母ともに香川県の讃岐広島の出身で、私もここで生まれ5歳ころまで育ちました。

讃岐広島は塩飽諸島に属します。塩飽（しわく）とは瀬戸内海の西（豊後水道）と東（紀伊水道）の海流がちょうどぶつかりあい、まるで潮が湧くような海になることから名づけられました。塩飽諸島は塩飽水軍の島々。航海術にたけ、勝海舟率いる咸臨丸に乗り込んだ水夫も11人いました。

豊臣秀吉や徳川家康から朱印状をもらい、安土桃山時代から江戸時代にかけて「人名制」という自治権を得ていました。

（讃岐広島…中央に見えるのは王頭山）

時代を読み取ることにたけた塩飽水軍

「歴代の天下人から送られた朱印状がそれだ。織田信長から送られた朱印状には、天下布武の朱印があった。注目すべきは、徳川家康からの朱印状。日付が慶長5年9月28日とある。関ヶ原の戦いが慶長5年9月15日だから、早い段階で徳川が勝利することを読んでいたことがわかる。操船技術の高さを物語るエピソードも残されている。小田原城攻めのとき、塩飽水軍をはじめ四国・九州の軍船は米を積んで小田原を目指した。途中で台風に遭い、ほとんどの船が避難するなか、塩飽水軍だけは台風をものともせずに乗り切った。このことに豊臣秀吉は感心し、650人の船方に1250石の領地を与えた。船方たちは「人名」を名乗り、自治を行った。塩飽水軍が勤番所を所有していたのはそのためだ。塩飽水軍の繁栄は江戸時代にピークをむかえる。幕府の御用船方として活躍し、廻船業で巨万の富を築いた。」

（2015年1月4日テレビ朝日放送　　村上水軍と塩飽水軍 海の覇者 瀬戸内海賊ヒストリーより）

（旧尾上邸…廻船業で栄えた邸宅）

島は花崗岩でできていて、青木石（青みがかった御影石）の採掘と沿岸漁業が現在の主な産業です。最近は外国からの大量の御影石の輸入により、石の採掘は衰退してきています。今年2月現在で島の人口は195人で、ほとんどが高齢者です。限界集落になるとおもいます。

小学5年生のとき、母方の伯父が新しい船を造りました。進水式のときは、にぎやかに船から餅を撒いて祝ったあと、親類一同揃って石段で有名な金毘羅宮に、船の安全祈願に出かけました。そのころの島は活気があり、船着き場には荷積みを待つ大きな御影石がごろごろしていました。祖父母も健在で親類もたくさんいて…、今からおもうとまるで遠い夢のようなできごとです。

島にはもう10年くらい帰っていません。10年前にはもう父の実家は竹とツタにおおわれ、朽ちかけていました。物言わぬ石垣ばかりが残るのみです。今は90歳半ばの母方の伯父が独りだけ暮らしていますが、いずれ親類縁者は誰もいなくなることでしょう。

奈良にきて茶粥が有名と知りましたが、私にとって茶粥といえば、祖母に作ってもらった碁石茶の茶粥の味が忘れられません。

＊碁石茶…高知県長岡郡で生産される発酵茶。黒色で碁石に似る。塩飽の船乗りが好んで食す。

やさしい昆虫講座　４６

「会員さんからの質問です」

木村　裕

会員さんから質問のあった昆虫を２つばかり紹介します。ホームページのカラー版で見るとよく分かります。

質問１：ヒイラギの葉が褐色になって枯れたようになっているのは何でしょうか？

回答：葉をじっと見てください。春に開いた柔らかい葉の周囲が熱湯をかぶったように黄赤褐色になっていることでしょう。

ヘリグロテントウノミハムシと称する甲虫のお子さまが住み着いた結果です。成虫は２つの赤い日の丸模様の黒い紋付を着ており、一見テントウムシのように見えます。しかし、手を触れようとするとピョンとノミのように跳ね跳ぶのが特徴です。

幼虫は黄色のウジムシのような虫で葉の中に住んでいます。葉の表皮と裏皮の間の狭い隙間に入り込み、内部を食い荒らして空洞にします。そのため、被害を受けた部分は淡褐色になって枯れます。少し注意して観察すれば中にいる虫も透けて見えます。住処の環境が悪くなると、足はなくても体を器用に動かして葉から抜け出し隣の葉に移動するようです。

ヒイラギが大好きですが、ヒイラギモクセイも好物のようです。おいしいとは言っていませんがイボタの葉も食用にします。

質問２：木の葉の上に油滴のような物がいっぱい付着し、舐めてみると甘いですが何でしょうか？

回答：通称、**甘露またはハニューデュウ**といって甘い液体です。しかしこれは木の葉っぱからの送り物ではありません。

アブラムシさんやカイガラムシさんからの贈り物？です。木の汁を吸って自分に必要な物を吸収し、不要になった物を排出した残り物です。虫さんが糖尿病を患っているわけではありません。辛党かも？

油滴が葉に付着しておれば、その葉の上方にある枝や葉にアブラムシ又はカイガラムシがいっぱいいるはずです。アブラムシの場合、１枚の葉に100匹くらいはついており、一斉に放出するのでその葉の下におれば霧雨のような感じで落ちてくるのがよく分かります。

シイタケ菌打ちイベント・報告

山本　隆造

2月24日（土）シイタケ菌打ちイベントが開催されました。厳しかった今年の寒さも一段落し、当日は素晴らしい天候に恵まれました。子供21名と保護者16名、計37名の参加を得、会員40名がスタッフとして対応しました。

鈴木会長の「みなさん、スタッフのおじさん、おばさんたちとたくさんお話をして、楽しい一日にしましょう」との開会挨拶でスタートです。記念撮影を済ませ、シイタケ菌打ちとコナラの植樹、2班に分かれて山に入ります。

シイタケ菌打ちは、スタッフがあけたホダ木の穴に、シイタケ菌を培養した駒菌を差し込み、木槌で打ち込む作業です。見るもの触れるものすべてが初めての体験に、子どもたちの夢中の姿とワクワク感が伝わります。シイタケのウンチク話には保護者の方々も興味津津です。

コナラの植樹は、ならやまの経団連皆伐地区にどんぐりから育てた3年目の苗を、腐葉土と真砂土で植え付けます。支柱で苗を固定し、名前を書いたプレートを取り付けて完成です。傍らで見ていた幼い妹が「○○ちゃんもやりたーい」とお母さんにおねだり。心優しいスタッフは「○○ちゃんも植えるぅー？」「うん」と満面の笑み。時間いっぱいまでもう一本植樹のお手伝い。後半の組では苗木が不足し、急きょ苗床から運搬なんてことも。

昼食ではならやま名物の「豚汁」が振る舞われ、みなさんおいしいおいしいと大好評です。

午後の部は遊びの森での山遊びと立木の伐採。山遊びは事前に準備した、丸太渡り（ロープ有り・無し）、木登り、ハシゴ登り、ブランコ、ミラーウォークなどに加え、子供たちが自発的に考え出した「ダルマ木落し」（切株の上に丸太のスライスを積み上げ、3m程の所から木片を投げ命中させて落す）と丸太渡りの「ロープを揺らす」なども人気でした。子供たちの発想は自然の中で大きく膨らみます。

立木の伐採は径3～5cm程のソヨゴを切って枝の処理をします。ほとんどの子供はノコギリやハサミを使うのは初めて。苦労しながらも切れたとき「よう頑張った」と言うと、少しばかりの自信、達成感とテレが混じったような笑顔が可愛いです。

終了後アンケートを書いてもらい、シイタケが顔を出したホダ木のお土産を手に、今回のイベントも無事終えることができました。

事前の準備、当日のスタッフの皆さま、まだ寒さの残る中お疲れさまでした。

自然教室だより

辻本 信一

3月・春のならやま自然観察会報告

平成30年3月6日（火）、啓蟄のこの日、「ならやま」に息づく身近な植物の観察を目的に、今年度最後、今年初めての節目の自然観察会を私たちのホームグラウンド「ならやま」にて開催いたしました。参加者は16名。天候にも恵まれ、たくさんの方にご参加いただきました。

【集合写真】

午前中は、「日ごろ足を踏み入れることの少ない里山林内を探索したい」との参加者のご要望にお応えし、ならやま里山に入山。鈴なりに花を咲かせた「アセビ」、赤みを帯びた独特の木肌の「シャシャンボ」、実生からしっかりと成長した「シリブカガシ」、更には開花間近の「クロモジ」など‥、樹木を中心に観察しました。

【里山入山】

うっかりしていると気がつかないところでしたが、散策路では冬眠から目覚めた「テングチョウ」が私たちを迎えてくれました。

【冬眠から目覚めたﾃﾝｸﾞﾁｮｳ】

散策の途中、「タケノコ平」では、古川さまより名前の由来を説明いただき、竹林と格闘した開墾当時の苦労話もお聞きしました。

また赤土が露出した通称「赤岳」南の松林では福田さまより「先日、松茸栽培のアドバイスにお越しいただいた藤本先生より、マツの生育状況、土壌、日当たりの面から、この地は松茸栽培に最適とのお墨付きをいただいた」との話がご披露されました。

さらにこの後「実りの森」にも足を運び、紅梅、白梅の花の競演、ブルーベリーの挿し木を鑑賞。アッという間に昼食の時間を迎えました。昼食時には、西谷さまより味噌汁とぜんざいの振る舞いがあり、参加の皆さんも大満足でした。

昼からは、ベースキャンプ周辺の野草を中心に観察。昨年同様、群れて咲くオオイヌノフグリは夜空に輝く星のごとく、ホトケノザのすくっと立った蝶形の花の周りには赤いルビーのような輝きの閉鎖花が彩を添えます。

ベースキャンプ北側では、「フキノトウ」がしっかりと蕾をつけ春の訪れを告げていました。どの草花も可憐で、春の訪れとともに出会う彼ら（彼女ら？）に自ずと心が高揚します。

【フキノトウ】

さらに歩を進めた皇帝ダリア園では、最近特に川辺でよく見かけるようになった帰化植物「ヒメリュウキンカ」が光沢のある黄色の花を咲かせておりました。きれいな容姿とは裏腹に繁殖力が強く、蔓延が危惧される植物の登場です。（かわいそうですが、早めに駆除しなければなりません。）

【ヒメリュウキン

紙面に書き切れないほど話題満載でいろいろな意味で収穫いっぱいの観察会となりました。

いろいろな出会いのある自然観察会に皆さまも是非ご参加ください。

4月・春の奈良公園　桜見物のお知らせ

次回自然観察会は、昨年も好評を博した奈良公園での桜見物です。下記要領にて実施致しますので、皆さま、奮ってご参加ください。

1. 日　時：4月3日（火）10:00～14:00 予定
2. 集　合：近鉄奈良駅、行基像前
3. 持ち物：弁当、飲み物、有ればルーペ
4. 観察ルート：春日野園地を中心に奈良公園内

歴文3月・月例研修会報告

早春の龍田古道を歩く

杉本 登

ぽかぽか陽気の 3 月 13 日（火）に JR 大和路線三郷駅に 28 名の皆さんが集まる。まず**龍田大社**に参拝、創祀は 2108 年前の崇神天皇の頃とされまさに神話時代の古い社だ。ご祭神はシナツヒコ、シナツヒメで風の神様。日本で唯一の風を祀る神社で、昨年 10 月には、平昌五輪のスキージャンプで銅メダルの高梨沙羅さんもお参りにきたそうだ。

参拝の後、万葉歌人**高橋虫麻呂**の長歌について説明する。この歌は 732 年に藤原不比等の子、宇合（うまかい）が西海道節度使として赴任するのを見送りにきた時に詠まれた。情景描写に優れた歌である。三郷駅前には犬養孝先生揮毫の高橋虫麻呂の万葉歌碑がある。

犬養先生によれば万葉の時代、歌は声に出して朗唱していたそうだ。貴族は別として庶民は文字を知らなかったからと言われて納得、私もまねをして声に出し朗唱している。歌を朗唱するのが苦手な方も、大きな声で歌うことは健康にはすこぶる良い。「シニアは大きな声で歌うべし」と、全員で朗唱する。

すぐそばの磐瀬の杜には、**鏡王女**の天智天皇に捧げた相聞歌が刻まれた歌碑があり、ここでもさらにいくつかの万葉歌を紹介する。

（峠八幡神社前のお地蔵さん）

龍田古道はここから登りの狭い山道となり次の目的地の峠八幡神社へと向かう。**龍田古道**はここで川沿いの下ツ道と山越えの上ツ道とに分かれる。この境内で昼食と休憩をとる。

昼食後、峠を下って次の目的地、**亀の瀬地滑り資料館**に向かう。資料館では国土交通省の方から「亀の瀬の地滑り」についての説明を受けた。

最初にビデオを見た後、1Ｆパネルの前で地滑りのメカニズムや規模の話を聞く。もし地滑りを放置すると、大和川が堰き止められて大阪側に大土石流となって流れ出し、その被害は 4 兆円とか、すさまじい規模である。奈良県側も浸水被害は出るだろうが、主として大阪を守るために地滑り対策を実施しているとのことである。

ここで地滑りのメカニズムの説明がある。大昔火山が噴火し溶岩が流れ出し固まった後、粘土層が堆積し、その上にまた火山の溶岩が流れ出し固まった。つまり土中に滑りやすい粘土層の地層が存在する。そこに大雨が降ると粘土層が水分を含み滑り始めるということであった。

粘土層から水を抜くための井戸や、排水トンネルを見学した後、昭和 7 年に地滑りで埋まった旧関西線のトンネルを見る。ここは水抜きトンネルを開削中に偶然見つかったもので、明治 25 年に作られたレンガ造りのトンネルがそのまま姿を見せる。その後大和川の南側へ線路を付け替え、2 本のトンネルを掘る大工事が昭和 7 年 12 月 31 日に完成した。

わが国最大規模と言われる亀の瀬の地滑り対策は、昭和 37 年に始まり平成 22 年に完了した。その直後に近くの稲葉山が動いているのが判明し、現在も対策工事が継続されている。50 年以上も続く大事業を、近くに住んでいながらほとんど内容を知らず、今回地滑りのメカニズムや対策工事の概要を知る事ができた。大変良かったと感じている。

Gallery ならやま

▲水彩画「蔵」　永井 幸次

▲水彩画「箕面にて」　八木 順一

▲工芸「葛の蔓で作った篭」　菊川 年明

▲園芸「赤いカトレア」　坂東 久平

▲陶芸「多肉鉢」　西岡 正平

▲クラフト「トリケラトプス」　村上 雄之

皆さまからのご応募をお待ちしています。
絵画・陶芸・写真・墨絵・手芸作品・
パッチワーク・切り絵・自然工作など

ならやまプロジェクト

明るく・楽しく・無理をせず

活　動　予　定　日

4月	5（木）12（木）19（木）26（木）
5月	3（木）10（木）17（木）24（木）31（木）

◆場所：奈良市佐紀町、奈良阪町、法蓮町、法華寺町にまたがる約16haの里山林地（県有林）

◆ **集合：現地ベースキャンプ地・午前９時**

◆ **終了予定：午後３時**

◆アクセス

① ＪＲ平城山駅下車：東口から南へ徒歩10分

② 近鉄奈良駅：バス13番乗り場　115系統　8：28発、高の原行き（平日）

③ 近鉄高の原駅：バス１番乗り場　115系統　8：36発ＪＲ奈良駅西口行き（平日）

②③とも「佐保台西口」又は「平城大橋」下車徒歩７分

◆ 携行品など：弁当、飲み物、軍手（作業用具は現地で用意）

◆ 環境保護のため、お椀、箸、コップなどは各自ご持参ください。

◆ 連絡先：八木 順一

里　山

4／5　**「協働作業」**松林植菌・ｱﾀﾞﾌﾟﾄﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

枯死木伐採・整理／薪割り／薪棚作成

12

枯死木伐採・整理／薪割り／薪棚作成

19　26

枯死木伐採・整理／薪割り／BC屋根修理

景　観

4／5　**「協働作業」**松林植菌・ｱﾀﾞﾌﾟﾄﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

整備：BC周辺整備

ビオ：水生生物観察調査

花：茗荷花壇整備、施肥、柵作り

12

整備：彩りの森周辺整備

ビオ：レンコン畑整備

花：東花壇の草取り、整備

19

整備：彩りの森周辺整備

ビオ：春の水辺観察

花：七草用花壇作り、名札立て

26

整備：実りの森整備／ビオ：西池歩道整備

花：花生姜園整備／花菖蒲園草取り

エコファーム

4／5　**「協働作業」**松林植菌・ｱﾀﾞﾌﾟﾄﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

茄子　唐辛子　里芋の畝作り

果樹：ブルーベリーさし芽／柑橘類　施肥

12

カボチャ　枝豆　サツマイモ　畑の畝作り

ヤーコン植え付け

果樹：鳥よけネット張り

19

里芋植え付け　生姜植え付け

枝豆播種　ラッカセイ播種

26

茄子　唐辛子　カボチャなど植え付け

黒米苗代作り

果樹：イチジク、梅　施肥

パトロール

4／5　**「協働作業」**松林植菌・ｱﾀﾞﾌﾟﾄﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

保護植物の柵更新

12　丸太階段、手摺補修

19　観察会予定

（ミツバツツジ、ショウジョウバカマ他）

26

観察路点検整備

行事案内

４月度月例研修会のご案内

桜花爛漫の一日、「日本で最も美しい村」を宣言した、室生赤目青山国定公園に所在する宇陀郡曽爾村（そにむら）を訪れます。村の大半を占める山地は室生火山群に属し、荒々しい山肌を見せる鎧岳、兜岳そして屏風岩などの珍しい柱状節理の岩壁は、国の天然記念物に指定されています。

屏風岩公苑の樹齢 100 年を超える山桜約 300

本が高さ 200m、長さ 1.5ｋｍの屏風のような大岩壁をバックに咲き乱れる景色は圧巻です。

曽爾川を隔てた対岸には、「倶留尊山（くろそやま）」（1038m）が聳え、その麓に湿原「お亀池」を中心に広がる**曽爾高原**は一面ススキに覆われた草原で、この時期は青い絨毯が敷かれたような、爽快な景色が広がります。

帰途時間があれば**佛隆寺**を訪ねます。空海の高弟、堅恵が室生寺の南門として創建した寺で、威勢よく枝を張った巨樹「千年桜」は、県下最古の桜といわれています。

＊ 実 施 要 領 ＊

日　時：4 月 16 日（月）午前 8 時発（雨天決行）
集合場所：近鉄奈良駅東・商工会議所前
コース：商工会議所前－曽爾高原（10:00）－屏風岩公苑（12:30）－佛隆寺－商工会議所（17:00）
持ち物：　弁当　飲物　雨具　ストックなど
参加費：　3500 円（バス代・缶ビール代など）
担　当：　中井 弘・大田 和則・冨井 忠雄
申込先：　中井 弘

「古代吉備の歴史探訪の旅」予告

今回は、弥生時代に出雲、ヤマトと並んで栄えた岡山県・古代吉備の国を探訪します。

吉備は、弥生時代の早い時期に稲作を始め、末期には、最大規模の楯築弥生墳丘墓を造営した。

古墳時代に、ヤマトに次ぐ勢力を維持していたが、雄略天皇によりヤマトの支配下に入る。

主な訪問先は、赤穂大石神社、吉備津彦を祀る吉備津神社、巨大前方後円墳の先駆けとされる楯築弥生墳丘墓、吉備最大の造山古墳、五重塔で有名な備中国分寺、ベンガラで栄えた吹屋の里とベンガラ館などです。

≪実 施 要 領≫

1. 実施日：5 月 22 日（火）、23 日（水）一泊
   宿泊先：ピュアリティまきび(公立共済)
2. 募集人数：28 名（満員になり次第締切り）
3. 乗り物：生駒交通デラックス観光バス
4. 費用：25,000 円（1 泊 4 食付き）
5. 申込：メール・ファックスにて下記まで
   歴文事務局　青木 幸子

****

５月ならやま活動&行事予告

＊ 奈良・人と自然の会　**総会**
　5 月 19 日（土）14:30～はぐくみセンター
＊ ならやま活動　(木)
　5 月 3 日　協働作業の日
＊ 歴史文化クラブ
　5 月 22 日（火）～23 日（水）
　予告 上記に掲載
＊ 天平祭
　5 月 4 日（金）・5 日（土）平城旧跡

平成３０年・２月度幹事会報告

日時：　2 月 27 日（火）14：00～17：00
場所：　奈良市中部公民館　2F 学習室
出席者：20 名　欠席者：3 名

Ⅰ　会長挨拶：
・当会は一人ひとりが主役で、重要なことは、
　川井さんの持論「良識ある個性」です。

Ⅱ　事務局・会計報告
①　会員数：153 名（新人加入　1 名）
　4 月にｼﾆｱ自然大学校より、12 名入会見込み
②　会計報告：1 月度収支報告、予算執行状況
　会費、ほのぼの基金、薪販売などで、目標を達成した。その他特に問題なし。
③　期末：3 月締めは 20 日
　3 月末に来期会費の徴収実施

Ⅲ　活動・行事関係、課題・懸案・確認事項
1.　3 か月及び当月スケジュールの検討と確認
・4/17:　臨時幹事会
　5/19:　第 17 回通常総会（はぐくみセンター）
2.　ならやまプロジェクト関係
・活動予定資料の確認（会報誌・HP に掲載）
3.　活動報告と予告（詳細は会報誌に記載）
・月例研修会　4/16、自然教室　3/6、歴文 3/13
4.　行事報告と予告：詳細は会報誌掲載
①　2/24:　シイタケイベント：参加者は児童 21 名、幼児 4 名、保護者 17 名の計 42 名
②　3/22:　新人歓迎会（雨天時は翌週）
　手打ちそば、各Ｇの活動写真パネル展示を計画
④　5/4-5:　天平祭出展
⑤　10/14:　朝日親子環境教室（稲刈り）
5.　助成金・交付金事業進捗状況説明
　各助成先への報告と来年度申請など取り纏め

Ⅳ　広報関係：会報誌 4 月号編成案承認

Ⅴ　企画会議：2/14　下記を討議
　今期決算と来期予算、助成金、総会関連事項
　新入会員の研修の重要性とスキルアップ対策

Ⅴ　懸案事項：
　野鳥の死骸、鹿の侵入、発見時は即連絡要
　次回　3 月 27 日（火）中部公民館

以上

◇　申し合わせ　◇

＊通常活動日【木曜日】や屋外のイベントは、前日19時前のNHKの天気予報（奈良気象台17時発表）で、当該地域の午前の降水確率が 60%以上の場合、中止とします。
　お問い合わせ:八木
＊通常活動日が中止になった場合は、翌日【金曜日】を振替活動日とします。
＊臨時活動日を月曜日にすることがあります。
（事前に担当役員から連絡します。）

お水取りが終わると春が来る

今年の初日は温かく、最初の週は最高気温が平年より 5～10 度も高くて、22 度を記録したほどでした。それでもやはりお水取りらしく、次の週は平年並みに寒くなり、最低気温がマイナスになった日もありましたが、終わりの 3 月 14 日には春の陽気となりました。

ならやまにも、新入会員が大勢参加されるようで、楽しみにしています。早く馴れて居心地の良い場所になればと期待しています。

「初心忘れるべからず」の「ことわざ」がありますが、入会時の新鮮で謙虚な気持ち、志を忘れずに定着をしていただきたいと思っています。

（行々子）

水取や氷の僧の沓の音　　芭蕉

会報誌［ネイチャーなら］･第195号
発行：奈良・人と自然の会
URL ： http://www.naranature.com
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
編集チーム代表：坂東久平

表紙写真「新入会員歓迎会」

3 月 22 日にこの一年に入会された新人の歓迎会を行った。20 名を越える入会数は当会の最高記録である。　（南高梅の畑で）